

建築雑誌

8

2017
Vol.132
No.1701

JABS
Journal of Architecture and
Building Science

特集

「図」と「字」—— 繋ぎ合わせる建築のことば
Texts and Images-1 Architectural Literacy for Professionals

日本建築学会

Architectural Institute of Japan



2017年日本建築学会各賞
AIJ Prizes 2017

ジョンソンタウン再生プロジェクト

——米軍ハウスと創造的なコミュニティ、新たなライフスタイルが織りなすまちづくり

正会員 磯野達雄 殿(株)磯野商会代表取締役)

正会員 渡辺治 殿(渡辺治建築都市設計事務所所長)

選定理由

これは7,500坪に及ぶ敷地に立ち並ぶ米軍ハウスを町ごと再生し、新しい命を吹き込んだ類い稀なリノベーションによるまちづくりの例である。「ジョンソンタウン」と呼ばれるこの町は、1945年にジョンソン基地がつくられたことから、GHQの求めに応じて1953年に建てられた24戸の米軍ハウスがベースとなり、1978年の基地返還以降日本人向けの賃貸住宅となった後、荒廃しスラム化した通称「磯野住宅」を「よい住宅地にしたい」という受賞者両氏の熱い思いにより見事に復活したものである。アメリカ文化を連想させる自由な雰囲気と商店を媒介とした活発なコミュニティの存在がこの町を生き生きとさせている。

この業績が高く評価されるのには、幾つかの大きな理由が考えられる。まず、米軍ハウスの持つ建築学的価値を保存しつつ、米軍ハウスの理念を現代的価値で再解釈した自ら「平成ハウス」と呼ぶ新しい住宅のかたちを提案し、同じ敷地に35棟建築したことである。そのことが古い住宅を保存するだけにとどまらず、戸数を増やすことによりビジネスとしても成立する日本でも稀な賃貸住宅からなるニュータウンの誕生につながったと言える。

また、単に住宅を供給するだけでなく、新しい時代のまちのコミュニティによるイベントの開催と情報発信により地域の観光資源となり

えていることも重要なポイントである。街外部からの集客は結果的に住宅地の価値を高め、通常より高めと思われる家賃も相対的にバランスするものとなりうる。新たな生活スタイルが文化の発信となり、経済的な価値を生み、この町のアクティビティをさらに向上させることになる。

さらに忘れてはならないのは、貸主である(株)磯野商会がこの町の雰囲気と価値を維持するために、管理者としての熱き想いのもと、不断の努力を行っていることである。ジョンソンタウンにふさわしいライフスタイルの誘導や街並みを保つための住民への説明と協力依頼、これらの維持管理なくして現在のジョンソンタウンは存在しないと考えられる。これも受賞者の業績として高く評価できるものである。

一方で、平成ハウスがバリアフリーに配慮されているにもかかわらず、その家賃の水準は、高齢者にとって敷居の高いものであるかもしれない。しかしながら、生き生きとしたこの町は高齢者のアクティビティを誘発し、高齢者支援の新たな枠組みを生む可能性を秘めているとも言えよう。

以上のように、ジョンソンタウンの誕生からリノベーションとまちづくりまで、長年にわたる一連の業績は高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。

受賞所感

住人とつくった未来のタウン

磯野達雄は退社後、1996年、兄からこのタウンを引き継ぎます。しかし、タウンは老朽化・高齢化し、スラム化していました。

父が残したまちが「磯野スラム」と呼ばれていると知り、悔しくて夜も眠れませんでした。そういったなか、ぼろぼろの米軍ハウスに住みたいという居住者が現れて、ハウスの価値に気づきます。

タウンを「よい住宅地」にしたいと強く思いましたが、どうしたらよいかわかりませんでした。

一方で、渡辺は、学生時代に陣内秀信先生の著書に魅了され、未来のまちづくりの探求の旅に出ます。

アメリカに初めて渡ったとき、偶然ニューヨーク郊外の田園都市 Forest Hills Gardens に数カ月間、かつての子ども部屋に間借りして住みました。ひとつの家の作り方がみんなの生活を改革する可能性があるかと確信しました。

1年後にはペンシルバニア大学へ入学し、今度はクラレンスタインらによるSunnyside Gardenの調査を行い、大学にレポートを提出しました。卒業して数年後、イギリスに渡りコミュニティアーキテクトやスラム化したまちが活性化(Revitalization)した事例New Calderdaleも調査しました。

しかし、アメリカから帰国して15年以上が経ち、一向に未来のまちづくりはできそうもなく暗澹たる日々を過ごしていました。

2002年、磯野と渡辺は「磯野スラム」に立っていました。

磯野「この住宅地をどう思うかね？」 渡辺「残しましょう。素晴らしい住宅地になると思います」。ジョンソンタウン再生プロジェクトのスタートでした。

渡辺はアメリカ、イギリスで学んださまざまなコミュニティ+住宅づくりをベースに提案し、磯野はその意味をよく理解し実行し、23軒の米軍住宅の改修、35軒の平成ハウスの考案と建設、バリアフリー、電柱の移動、新旧路地の整備、イベントづくり、考えられることは何でもやりました。磯野は花と緑が好きで、外構の整備も積極的にを行い、私たちは住民とよく話しました。

タウンには文化的な若い家族が住むようになり、ひとりもいなかった子どもも50人を超え、住人による店も56を数えました。住人は自らハウスの周辺を整備し、イベントを企画し、私たちはそれを支援しました。みんな子どもたちを育て、生活と仕事を楽しむ家族で溢れ、高齢者も障害者も楽しく住むコミュニティと大勢の人が訪れるまちとなっていきました。

そして「磯野スラム」は「ジョンソンタウン」と呼ばれるようになり、私たち2人の夢は現実のものとなりました。

再生プロジェクトがスタートして15年。渡辺をまちづくりの旅に連れ出した本人、陣内先生が現地に現れました。都市景観大賞の審査でした。そして日本建築学会賞への応募を勧めていただきました。

磯野：このたび歴史的住宅遺産の活用保存の例として、多少なりとも文化的貢献ができたこと、そしてこれを評価していただいたことは大変な喜びです。このたびの受賞がタウンの住人にとって、「わがまち」意識の向上と励みになり、かつまた他の住宅地開発にかかわる方々にとっての参考になれば幸いです。

渡辺：この場を借りて、素晴らしい未来のまちづくりの旅と経験に導いていただいたすべての方々と、住んでいただいてタウンづくりに参加していただいた住人の方々に感謝したいと思います。

[文責=渡辺治]